

結末。そして前進

全日本社会貢献団体機構 会長

原田 力



2011年は忘れられない年になりました。あまりに大きな被害を前にして、今なお、復興の道筋を見いだせないでいます。しかしながら、この悲劇から私たちが学んだこともたくさんあります。

強い社会を創るためには、やはり人々の結束が欠かせないということもその一つです。いざというとき、すぐ隣の人の肩が必要になります。そして、それからの数日間、地域社会の助け合いが多くの命を救うのです。

普段からコミュニティができていく地域ほど、震災からの立ち直りも早いと聞きます。しかし、これはすぐに確立できるものではありません。信頼関係の構築には時間がかかり、それ相応の行動が必要になります。

この年間報告書に掲載されている全日本遊技事業協同組合連合会のホール関係者の皆様の活動は、まさにそうした作業であることに気付かされます。地域に溶け込み、時には牽引役として、時には潤滑油として、人と人を結び、強い社会を構築する効果を持っていると感じます。長年の活動を通じて、皆さんは子どもや高齢者、その他さまざまな社会的弱者と対話し、彼らの立場への配慮も身につけられています。こうした資質は、今後の日本においてますます重要性をもってくるでしょう。それが私たちの「社会貢献」の役割なのではないでしょうか。

一方、皆様からの会費を元に今年も多く多くの団体に助成を行いました。団体並びに関係者の皆様からは多くの感謝の言葉を頂戴しております。こうした諸団体との交流とネットワークづくりも私たちの力になってくれるものと考えております。

さて、大震災だけではなく、低迷する経済状況、不透明な福祉政策、進行する高齢化社会、そして電力不足などの問題が私たちを取り囲んでいます。遊技業界にとっても試練の時です。この難局を乗り越えていくには、私たち相互の結束をさらに強めていく必要があると考えております。

そのような思いから、今年の年間報告書の編集に当たり「結末。そして前進」をテーマに掲げました。大震災から立ち直り、復興するだけではなく、以前よりも強い日本にしていくという誓いの意味も込めております。

他人への思いやりと支え合いがごく普通に保たれている社会は、私たち自身にとっても暮らしやすい社会となります。また1年、夢を持ち、共に進んでいきましょう。

業界の社会的責務を果たす為に

全日本社会貢献団体機構 理事長

青松 英和



全日本遊技事業協同組合連合会の皆様、またご関係の皆様、今年度より全日本社会貢献団体機構の理事長を務めさせていただき青松でございます。

たいへん重責のある職務につき、身の引き締まる思いですが、皆様のご協力を得まして機構のため、遊技業界のために全力を傾けていきたいと考えております。

これまで4年間、原田前理事長の下で全日本社会貢献団体機構の筆頭理事としてしっかり勉強させていただきました。今後も原田前理事長の思いを受け継ぎ、理事長の任に当たりたいと考えております。

さて業界の急成長を支えた高度成長時代はとうに終わり、少子高齢化の時代の到来と長引く経済の停滞感の下、私たちの業界を取り巻く社会も大きく変わろうとしています。私たちの業界も現在全国に約12,000店舗、売上高約20兆円の娯楽産業になって、「地域の身近で手軽な大衆娯楽」という狭義の概念だけで社会や人々と向き合うのには足りない時代になっています。こうした変化を敏感にとらえ、私たちに求められる新しい役割を徹底して果たすことが業界の社会的責務を果たすことにつながるのではないのでしょうか。

今年の活動報告書に目を通して全国に同じ志の方がたくさんいることを再認識し、勇気づけられました。真摯に活動を続けられている皆様のためにも、またその成果を業界全体のものとするためにも、全日本社会貢献団体機構の活動を更に充実したものにすることが私の務めでもあると決意を新たにしております。

さらに、業界の社会貢献活動をより多くの方々にお知らせすることにも引き続き、力を注ぎたいと思います。私たちの取り組みは社会への感謝の表現ですが、プレゼンテーションでもあります。よりよい明日を作るためには、あらゆる方が社会へ優しいまなざしを向けなければなりません。多くのマスメディアを通じて、語りかけていきたいと考えております。

ぜひ皆様もこの年間報告書に目を通してください。顕彰部門の各地での活動はモチベーションの維持に役立つでしょう。また、助成部門の事例は現代の社会のひずみや弱者の存在を示唆してくれるはずです。これらの情報を共有することで、私たちの団体の活動が更に強固なものになると信じております。